

好きなことに 集中した経験が 仕事をする力に

好きなことをした経験は、将来の仕事選びにも生きる。子どものための職業観形成支援プログラムを行う朝山あつこさんに、

「好き」を見つけるために親が支援したいことを聞いた。

ワークショップで多くの子どもたちと接してきた朝山あつこさんによれば、中学、高校、大学と年齢が上がるほど、自分の好きなものがわからなくなり、夢や目標を見失う傾向があるという。「就職する時期になっても、「自分は何をやりたいのかわからない」と話す大学生は多いですよ。仕事は、好きなこと、やりたいことが選べれば一番幸せ。好きなことには一生懸命になれるし、失敗しても工夫して頑張れます」。遊びを通して好きなことに夢中になることで、子どもは集中力、持続力を養う。こうした体験が将来仕事をする力につながる。

「9歳ぐらいまでは、親が横から口出しせず、好きなことを自由にやらせたほうが良い」と朝山さん。何かを夢中でやっていたら、中断しない

ようにするのも重要。「声をかけるタイミングには気を付けます。夢中になっているときに、子どもはすごい能力を発揮しますから」。家庭では、好きなことを思い切りできる時間を確保してあげることが親の役目だ。

スポーツや芸術など、親が環境を整えてあげなければ、子どもが経験できないこともある。「そういう分野は、子どもの興味や関心をうかがいながら、くれぐれも押し付けにならないように」機会を与えたい。親ができる範囲で、常に子どもにチャンスを提供していくことが必要だ。

日常の会話で、「仕事」や「働く」といったことを意識して子どもに話すのも、自分の将来をイメージさせることにつながる。「大人になつたら仕事を選んで働くんだよ」「学校

目標がある

日常生活に、 仕事について考える 機会はあふれている

子どもが自分なりの職業観を持ち、将来への夢や目標を抱くうえで、折に触れて親が「仕事」や「職業」の話をしてあげることが重要だ。難しく考える必要はない、身の回りにあるさまざまなことが、「働くということ」とつながっていることを示してあげるといい。

- 1 駅のホームで……
時刻表を見ると、各駅停車もあれば、急行、特急などもある。
親→「何がお客様にとって便利なのかを考えるお仕事の人がいるのね」
- 2 ハンバーガーショップで……
ハンバーガーショップにも、さまざまなタイプの店がある。
親→「このお店は注文が入ってからポテトを揚げるんだって。前に行ったお店は、お客様を待たせないように作っておいしかったね。お店によってお客様に提供するサービスの考え方が違うんだね」



NPO法人「キーパーソン21」代表理事
朝山あつこさん

川崎市のNPO法人「キーパーソン21」代表理事。「子どもたちに夢と職業意識を運びたい」をスローガンに、教育現場でキャリア教育に関するワークショップの実施支援をしている。3人の男の子の母。

<http://keyperson21.org/>

